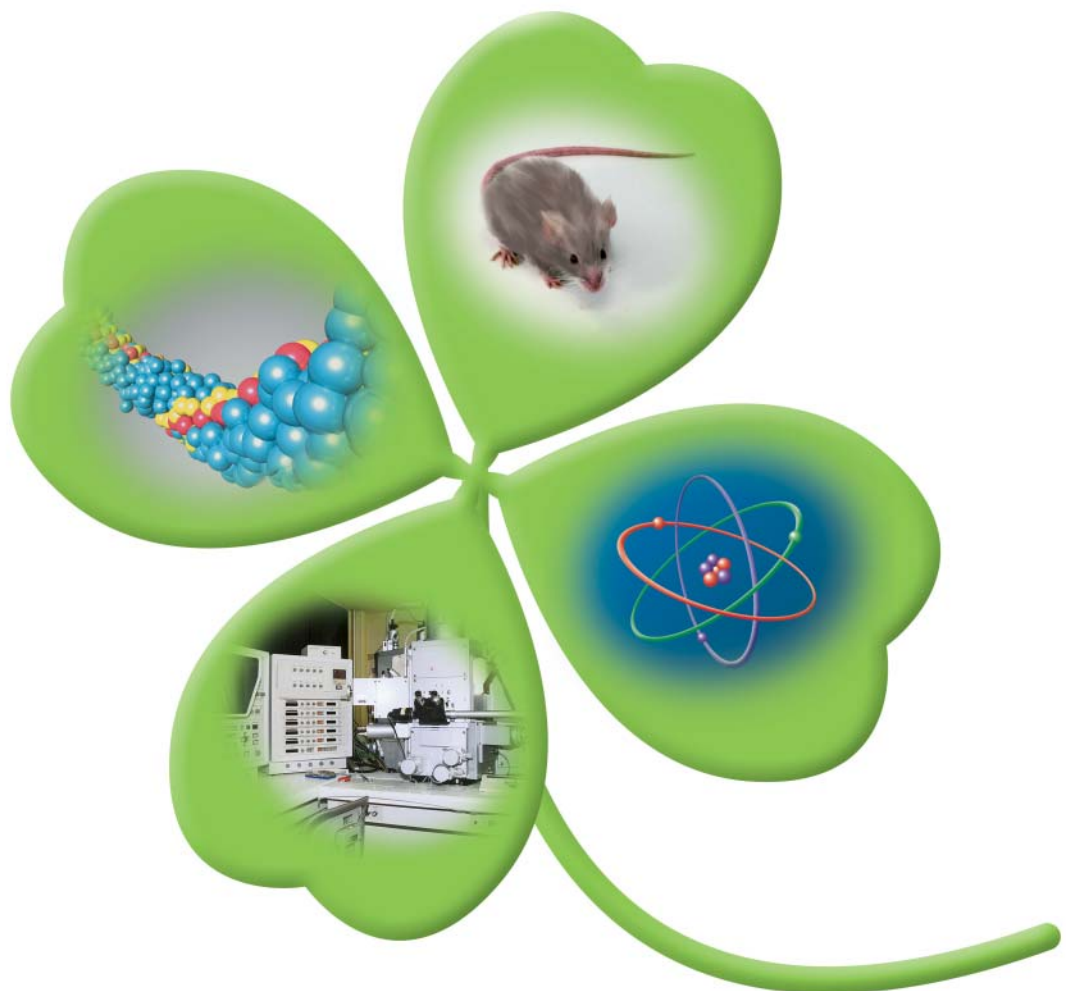


金沢大学
学際科学実験センター年報

2006

第 4 号



Annual Report No.4
Advanced Science Research Center
Kanazawa University, 2006

はじめに

学際科学実験センター長 森 厚 文

平成15年4月に5センター・施設（遺伝子実験施設、医学系研究科附属動物実験施設、アイソトープ総合センター、アイソトープ理工系実験施設及び機器分析センター）が再編統合され、学際科学実験センターとして発足して以来、早4年が過ぎました。設立当初から本年3月までセンター長を務められた山口和男教授の強力なリーダーシップのもとに、異なる沿革をもった研究分野（領域）・施設の相互理解が深まるとともに、運営予算の確保、教員の整備（教授3、准教授5、助教4）などが順調に進み、本センターの設置目標が達成されつつあります。

本センターの役割は学内外の「研究・教育支援」とセンター独自の「研究推進」であり、車の両輪のようにうまく機能を発揮してこそセンターの発展につながると言えます。本年報は年度ごとの事業、研究・教育支援活動、センター独自の研究活動などを取りまとめて収載したものであり、自己点検評価の一環として発刊しています。平成18年12月2日に第1回外部評価発表会が開催されましたが、本年報は評価資料の1つとして利用されました。5名の外部評価委員は、「研究・教育支援活動」及びセンター教員の「研究成果」とともに総じて良好と評価いただき、本センターの意義と役割が認められたものと考えられます。また、貴重なご意見やご要望をいただきましたので、それらを参考に利用者の立場に立った研究環境の改善が今後の課題です。

金沢大学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」をめざし、日本海側にある基幹大学として我が国の高等教育と学術研究の発展に貢献するとともに、東アジアのアカデミアの拠点として世界に向けて人材と知の情報を発信しています。一方、最近、国立大学をとりまく環境は厳しさを増してきています。たとえば、「経済財政改革の基本方針2007（骨太の方針2007）」では、時代や社会の要請にこたえる国立大学の更なる改革、競争的資金の拡充と効率的な配分、運営費交付金の改革（教育・研究面、大学改革等への取組の視点に基づく評価に応じた適切な配分の実現）などが提言されており、成果主義に基づく大学間の競争が激しくなると予想されます。

このような背景のもと、本センターは更なる改革が必要と考えられます。まず、研究支援体制の整備（基盤的な研究環境の整備・充実、安全管理・教育など）の重要性を主張するとともに、センター独自のプロジェクト研究の推進を図らなければなりません。その上で、平成19年4月に設置されたフロンティアサイセンス機構（金沢大学の特色ある重点研究プログラムを世界的な教育研究拠点に育成することを目指した研究機構）との有機的連携、すなわち重点研究プロジェクトへの主体的・積極的参画が必要であり、そのためには、大学執行部及び教職員などのご理解とご支援が不可欠であります。今後とも、センターの発展のためにご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2006年度学際科学実験センター一年報

目 次

はじめに

I センターの概要	1
1. 理念・目標	1
2. 設立の経緯	2
3. 組 織	3
II センターの事業報告	4
III 研究分野の研究教育活動状況	13
遺伝子改変動物分野	13
ゲノム機能解析分野	19
トレーサー情報解析分野	26
機器分析分野	35
革新脳科学プロジェクト研究領域	37
IV 研究施設の活動状況	40
実験動物研究施設	40
遺伝子研究施設	45
アイソトープ総合研究施設・アイソトープ理工系研究施設	47
機器分析研究施設	61
学際科学実験センター利用業績一覧	62
付 録	77
職員等名簿	77
各種委員会委員名簿	78
諸 規 程	79
設備機器一覧	90

